

人生の店じまい—私の場合

岡部光明

われわれ三七会のメンバーは、今だいたい七十九歳だ。すでに人生を閉じられた方々もいる一方、そうでない場合も明らかにその準備時期に入っている。

私の場合、人生の幕引き段階に徐々に近づいているのではないかという気持ちは、比較的早い時期に訪れた。およそ15年ほど前であろうか、その場合に欠かせないのは単に色々な思い出や人生史を書き残しておくことではなく、本当に恵まれた（と自分では考えている）40年余りの現役時代に学んだことのうち、自分が確信をもって伝えておきたいことを次の世代に伝えるべくきちんと残すことがそれではないか、という気持ちであった。

思い起こせば、自分は幸いにも現役時代、この上なくありがたい2種類の職業経験をすることができた。かつてのアーモンド・グリコのキャッチフレーズを援用するならば「1粒で2度おいしい」人生だった、というのが率直な気持ちである。

大学卒業後の最初の仕事は、金融関係の大きな組織に所属して20年あまり働いたことであり、そこから実に多くのことを学ぶことができた。そして二番目の職業は、大学教員という仕事である。日本ではバブル経済がピークを迎えた時期（1989年）から合計4年間、海外（アメリカ、オーストラリア）の3つの大学で教壇に立ったのを皮切りに、その後は国内の二つの大学で20年あまり務めることになった。若い時期から憧れていた大学教員という職業に幸いにも就くことができたわけだ。

第一番目の組織における仕事は、日々先輩から教えられ、その後は自分も後輩たちにそれ教えるという日本の組織に特有の仕事パターンのなかで生き、そして所属組織の目的を達成することであった。そこで得たことは、例えば様々な文章の書き方、明快な説明や報告の仕方、組織のなかでの働き方など非常に多くのことがあったが、その経験を私が特に語る必要性は乏しい。

一方、第二番目の大学教員の仕事は、通常、研究と教育の二つの任務であるとされているが、実態は研究、教育、そして多種多様な雑務（入試事務、カリキュラム、教員人事等）の三つがある。自分にとっては、これら三つはいずれも同様かつ同程度に楽しいものであり、大学教員こそ自分にとっての天職であると、終始思うことができた。本当に幸いな人生後半の二十年間であった。それを経験することによって得られたことを伝えたい、という気持ちが強くあった。このため、私は15年ほど前、これに関して二つの「終活」（人生の店じまいプロジェクト）に着手した。

一つは、大学教育の究極的な目標は何か、に関する私の結論を取りまとめて示すことだった。それは幸い2013年に『大学生の品格』という書物として刊行することができた（図1）。そこでは、大学教育における重要事項を24の項目として整理した。そして、それらを大きく捉えるならば、普遍性と国際性を持つ三つの技量を学生が身につけることに帰着することを主張した。その三つとは（1）論理力と伝達力の基礎である「日本語力」（英語力ではない）、（2）社会力の基礎である「インテグリティ」（誠実さ）、そして（3）自己成長力の基礎である「向上心」である。そして、学生がそれらの意味を理解し習得することこそが大学教育の核心である、という考え方だ。

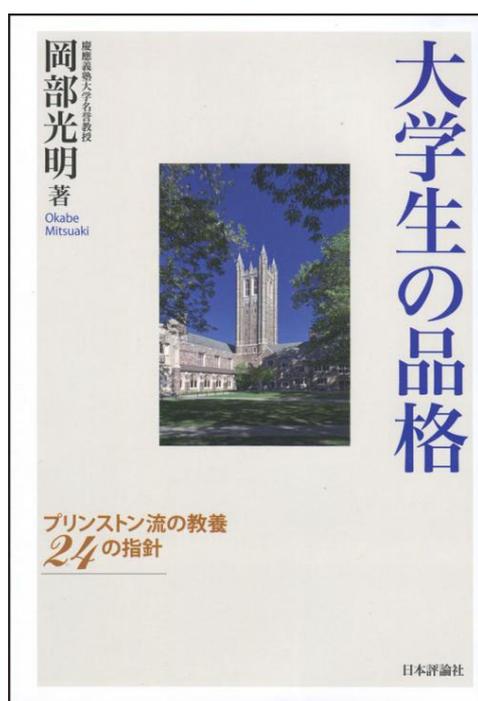


図1

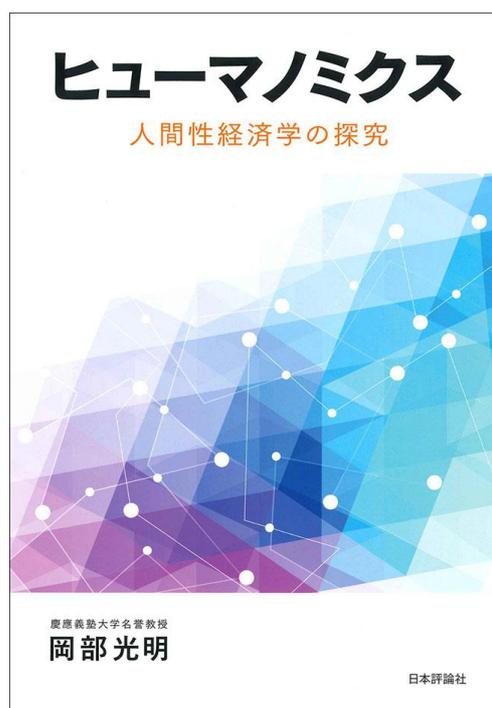


図2

もう一つの終活プロジェクトは、自分が大学生時代以来親しみ、そして職業や思考においても中心的位置を占めてきた経済学についてである。つまり、経済学は究極的にどのような学問であるべきかについて、自分が最終的に到達した理解を提示することが自分の責務と考えるようになった。それを進める過程において、私は20編以上の論文を書きそれを各種学会で発表するとともに、あるべき経済学（ないし社会科学）の大きな姿を継続的に模索する必要があった。10年以上にわたるそうした作業の結果、幸いにも本年半ばに『ヒューマノミクスー人間性経済学の探求』という表題を掲げる書物を刊行することができた（図2）。

経済学は、究極的には人々の幸せとより良い社会の実現を念頭においたものでなくてはならない、というのがこの本を貫く基本思想である。このため本書では、多様な学問領域における人間観を吟味して取り込むとともに、社会を理解するための新しい理論的枠組みも提示し、さらには個人の幸福実現と社会への貢献を同時に導く生き方（実践哲学）にまで議論を広げている。

このため450ページを超える大冊（そして定価も驚くべき高価）になった。しかし幸いなことに、本書に対するありがたい評価をしてくださる向きもある（インターネット書店アマゾンにおける読者の感想書き込み）。こうして、自分にとっての「人生の店じまい」の第二プロジェクトも、途中で病魔に冒されるといったこともなく幸い完成させることができた。これは、多くの人々や目に見えない大きな力によって支えられた結果であり、この上なく幸いなことだったといま思いを馳せている。